

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十七年七月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十四卷 第七号

三

次

(2)	釈迦の抑止と弥陀の引接	近角常觀	…	…	…	…	…	…
②	聞 イマカル	信	雜	錄	…	白	井成允	…
入	院					川	畠愛義	…
凡	骨	日誌	抄	…	井上 善右エ門	…	…	…
真	実	の宗	教	…	西元宗助	…	…	…
念	仏	詩	抄	…	亀岡邦生	…	…	…
平	和	に就	い	て	木村無相	…	…	…
花	田	正夫	…	…	…	…	…	…
(21)	(18)	(16)	(14)	(12)	(10)	(7)	(1)	

(通第三九六号)

釈迦の抑止と弥陀の引接

近角常観

大經五惡段の説法

讃仏偈は、諸仏菩薩が阿弥陀仏の淨土に詣うて、仏を讚歎し給う偈文であるが、それ程に阿弥陀仏の本願が一切諸仏に超え勝れ給うとは何處であるか？これが第一の問題である。今その意味を手短かに申せば、一切諸仏の教えは、諸惡莫作、衆善奉行である。あらゆる善はこれを修し、あらゆる惡はこれを廃し、自らその心を清うして仏の境界に到るとの教えである。まことに結構な尊い教えであるが、如何せん、私共実際ににおいて、眞面目にその如く行わんとしても行うことが出来ぬ。

これは淨土教の上でも、この大無量壽經を過度人道經と翻訳されたものがある程で、全体私共が眞面目に守るべき人道を説き給うた經である。中でも下巻にはかの名高い五惡段があつて、五惡を諒め、五善を勧められている。この五惡段の所など、これを読むと、凡そ一言一句として私共の心にあたらぬ箇處は無い。残らず私共が日常生活の浅間に天地の間に住んで居るが、この世に生きている寿命はいかほどでもない。上には賢明なもの、長者や尊貴なもの、富豪も居るが、下には貧賤のもの、低能なもの、愚鈍な者も居る。その中に不善の人が居て、常に邪惡な心を持ち、ただみだらなことばかり考えて胸に煩悶が満ち、愛欲が心に入り乱れて、起つても坐ても安らかでなく、貪欲のために財産を惜んでただ徒に得ることばかり考えている。また美女に対して邪視をつかって、外目かまわずふざけちらし自分の妻を嫌うて、他の女のもとへ出入りし、財産を蕩尽し、遂には国法に違うことをする云々。その第四の惡とは、世間の人々は、善を修めようと思わず、互に見習い教え合つて種々の惡事をする。二枚舌をつかい、悪口を云い、嘘つき、へつらい、或は人に告げ口をしてその徳をそこない、鬭争を起して世を乱す。或は善人を憎み嫉み、賢明の人をきづけてよろこぶ。両親に孝養もせず、師長を軽んじ、朋友に信義なく、何事にも誠意がない。若し自分が尊貴な地位に居れば、尊大にかまえて自分ばかり道に契つていてると思い、無暗に威勢を張つて人をあなどつてゐる。云々。

その第五惡とは、世の人々が、心おちつかず懈怠であつて、一向に善を修めず、身を治めず、家業を励まないたために一家親族が飢え凍えて困苦する。父母が意見すれば

しい處をお書きなされてある。一、二箇所を挙げて見ると、その第一惡とは、諸天人民及び虫けらの類に至るまで、衆惡をなそうとしていないものは無い。強い者は弱い者を征伏して互に殺し合い傷つけ合い、呑み合い噛み合つて、善を修めることを知らず、惡逆無道であつて、死して後、その罰をうけ、自然に惡道に墮ちて苦を受ける。その第二の惡とは、世間の人々は、親子、兄弟、夫婦、一家すべて義理を辨えず、國法に順わず、ただおごり、みだら、たかぶり、わがまままで、各々自分の快樂を欲して気ままなことをして、互に欺き惑わし、心と口が一致せず、また實がない。君主に對してへつらい媚び不忠でありながら、言葉たぐみにへつらい媚び、善人をねたんで無実の罪におとし入れる。君主が不明で、臣下を任用すると、君主の不明に乗じて勝手なことをし、君主をいつわつていろいろの惡事を重ねる。云々。その第三惡とは、世人は互に相い寄り相い抜け合つて共

目をいからし言葉も荒らく、意見に背き反逆することは敵同志のようである。こんな子ならむしろ無い方がいいと思う。又人から物を取るにも、あたえるにも節度がないから、多くの人々がみな迷惑する。又恩にそむき、義理を違えて、受けた恩に報いる心もなく、借りたものを返す心もない。かくて貧困におちてまた二度ともとのようになることが出来ない。ただ自分のためばかりを思つて、無道にも他人のものを奪い取り、それを勝手にまきちらす。こうした惡事が習慣になつて、他から奪い取つた財宝で、贅沢な暮しをし、酒にふけり、美味をむさぼつて無暗に飲み食いする云々。

斯様に私共の守るべき人道を説き給うのが五惡段の説法である。

抑止の文と親鸞聖人

ところで五惡段にこのように抑止があるのは何故かといふに、御承知の如く、大經には、第十八願に、阿弥陀仏の本願を説かれて「たとい我仏を得たらんに、十方衆生至心信樂して我国に生れんと欲して乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らず」と、かくことごとく救うと仰せられて、「唯五逆と正法を誹謗するをば除く」と、取り除くことが附加せられてある。全体本願に於てことごとく救うとあるのに、斯く取除くが設けられたというのは、これを釈迦の抑止と申して、釈尊が私共を諒めて下されたお言葉であ

る。この誠めのお言葉が、下巻になつて五悪段の説法となり、世間の人民等これこれの悪事があると、ひしひし私共の心中を抑えてお説き下された訳である。故に五悪段を読むと、一言一句が私共日々の行いに的中する。

こは現に私が煩悶した時に、この五悪段の文を書いて苦しんだことがある。その時自分に当ると思う一句々々に点を打つた、今もそれが残つて居ります。苦しんだ時だから、有難い処へは一つも打つていない。悪い所／＼と打つてある。これが即ち、唯除五逆誹謗正法とある抑止のお言葉に基くもので、釈迦嚴父のきびしいお誠めである。

而してこの釈迦の御誠めは即ち一切諸仏の教え給う諸惡莫作、衆善奉行の教えである。これは釈尊一代の教えにしても、飽くまで戒定慧の三學を守り、何処までも善をして行けという仰せの外に無い。三世十方、過去七仏の教えも皆これになる。即ちこれから今の唯除五逆誹謗正法のお言葉も出て来た訳であります。ところでこのお言葉は厳しいお言葉である。如何に阿弥陀仏の本願と云うも、五逆と正法を誹謗する者は助からぬという厳しいお言葉である。然るにここに気をつけねばならぬことは、親鸞聖人がこの十八願文を書いていられるのを見るに、如何なる場合にある。私は先日或る御宅に参りお内仏を拝んだ。法主台下

充分徹して無いようある。始めからこれを不要視して、悪くてもお助けと軽いことに取つて居るから、釈尊の仰せられた意味合がさつぱり明になつていてない。たま／＼俗諦門をやかましく言つ人は、釈尊の五悪段の教えは俗諦故、「善をせねばならぬのじや／＼」と、そのまま自分に当たがつて、そして「出来ぬからいかぬ／＼」と嘆いでいる。これでは一方に力説して下された弥陀の本願という味いが全然消えているから安心されようはずが無いのである。さすれば今私共の頂くべき点は何処にあるか。何時も繰返す例の福島県の或財産家の話である。息子が不要の物を買って來たので、こんな物を買つてはしようがない、と厳しく誠めて「買つた処へ返しに行け。然し汽車賃はやれぬから歩いて行け」そして母親に「歩いて行かすのだから握飯を作つてやれ」と云つた。子供はやむなく握飯を貰つて泣く／＼出て行つた。あとで母親を呼んで「お前汽車賃をやつたろう」「やつては叱られると思つてやりませんでした」と聞くと、計らんや「この馬鹿め、俺はああ云つたけれど、お前がやるだろうと思うて居たのに」と叱つたといふ話である。

一方で汽車賃はやれぬと言う嚴父の誠めは極めて激しい。そこになると現に親鸞聖人は、御子様の善鸞が、お慈悲の真意に背かれた為めに勘当なされた。これは飽くまで嚴し

の名号が懸けてあつて、名号の傍に矢張りこの御文が書いた。私共にすればこの御文はむしろ取つておきたい程に思うのに、親鸞聖人は如何なる處にもこの御文をはぶかれることがない、必ず本願と共に書き添えられている。して見れば私共もこの抑止の御一句を確り頂かねばならぬ。換言すれば、三世諸仏の御慈訓は、悪はしてならぬとの厳しい御誠めであるということである。

ところでここに遺憾ながら、何としてもその教えに隨い得ない私共といつものになつて来る。ここに問題が起つて来る、これから先きが問題なのである。

真宗の人に抑止の意が徹底して無い

こは現に日本の思想界にしても、問題はこれ一つになつて居る。一方真面目な思想からは、飽くまで正しくせねばならぬと考えて、その通り實際に行うこと専心する。ところがその結果は反対に、むしろ滔々として行き難い方面に趨つているという状態である。これにおいてか初めて諸仏に超え勝れた弥陀の本願が現われ興つて下されなければならぬということになる。

私は考えるに、全体從来の真宗の人々が、祖聖が抑止のお言葉を重視しておられるにかかわらず、どうもその意味が

いが、それは是が非にも押しつけて、絶対にいかぬとある厳しさではないのである。その裏に、母に金を渡したかと聞く父のこころは、その許すべからざる悪事であるが、それをしでかした子供の身がいよいよ可哀想で、如何にしても捨て切れる親心がある。これが弥陀仏の本願の御意趣である。

全体、從来の真宗の信者には、釈迦の抑止は方便である、あれは取去りてよいのだという聞き方があつて、折角涙の籠つた釈尊のお誠めをはじめから軽視してかかる風がある。「なに父はあんなに言うても、母はきっと金をくれる」と、これで父の意も母の意も分らぬじまいの人が多いのである。そもそも／＼釈迦嚴父のお意は、何処までも私共を善くさせたいが腹一杯である。私共としてはどこまでも戒定慧の三學を守つて行かねばならぬが、釈迦の遣法、諸仏の通誠である。凡そ人として善く出来なくてよいという法があるべき筈がない。しかるに末法の世になつて、その守らねばならぬことが「守り得ない私共」という者が出来てきた。ここにおいてその守り得ざる私なることをかねて知し召し、そのために特に憐み現われて下されたが、唯一、南無阿弥陀仏のお救いである。故に一方にこの真面目なる方面が無くては本願の有難味は頂けないのである。現に私如きもこのお慈悲を知らせて貰うたというは、畢竟このせねばな

らぬことに力を失い、自分の立場に行き詰って、初めて気がつくかせて貰うたのである。

「善くなりたい」と「悪くてもよい」と

今日の道を求める方には両面がある。従来真宗の教えを聞きつけた側と、新に理想を持つて立つて行こうとする青年諸君の側と、この二つである。両方共にここはよく聴き取つて頂かねばならぬ。

青年諸君にすると、真宗の教えは何程罪惡救済と聞かされても、元來出来るだけ善いことをしたいのが本意である。故にしたい／＼と、この点からは五善を求める五惡を避ける立場にある。殊に求道ということを標榜して来る人の総ては皆これである。而して実際に出来るかと云ふと、一つとして本当に実行出来ぬのに皆な苦しんで居るのである。私などもここで血涙をしぼつた、青年諸君も同様だと思う、その点では私は十二分の同情を持つ。

一方、聞きつけている側の人は、頭から「そんなこと出来るものか、出来るぐらいなら凡夫でない」と、口先きだけでは直ぐそう云う。して本当に安心しているかと云ふに否、實際は「自分はこんなに善くして居るのに、人が／＼」と思うている。心の底ではたゞ「自分はよくしている」否「せんならん」と思いつつ、聞く時だけ「悪くてもかまわぬのだ」という聴きようである。これでは何處まで行つ

詰り、どうにもこうにもしようがないことになる。
處が、聞きなれた側の人は、初めから「人間がそんなに喜べるものか、喜べぬままじゃ、悪いままじゃ、疑いのままお助けじや」と、言葉にお助けを引きつけるだけで、その実安心にも何にもなつて居らぬ。
以上この二種類がある。一つは修養風、一つは「しようがないからあるかまま勝手にやれ」という流儀である。如何なる人も必ずこのいすれかになつてゐる。

殊に私がこれを言うのは、今日世の中で、眞面目な青年が努力奮闘、而も如何程努めても思う様にいかぬので血涙を流して泣いて居る側の人がある。そうした方々に深く同情すると共に、一方真宗の人が「この儘ながらのお助け」と、これで自分は頂けた積りで居て、その実ちつとも頂けて居らぬ、その儘もとの処にじつとして居る「岸上に登れぬ／＼」と言ひながら、自分が沈んでいく事も知らずに居る真宗一派の人に、深く氣をつけて貰いたいのである。

これは日本の社会もそくなつてゐる。一面に眞面目／＼と、厳格な道徳主義、努力主義が盛んに唱えられる半面に何程やつて見てもどうにもならぬ處から、一方で悪いまま平氣で押し通そうとの主義が頻りに行われている。而もこれが頻々社会上の事実と現われ、両者がこれで苦しみを極めている有様である。終に何處をさがしても阿弥陀仏の本

てもきまりのつくといふことが無い故、余程よく気をつけなくてはならぬ」

なおこれが種々の形式をとつて現われる。中には法を求め、安心を得るために「もつと善くならねばならん」と言う人がある。「もつと喜ばねばならぬ、もつと徹せねばならぬ」と。これは一応他の善をするために苦しむとは違ひ、信仰のためであるから、自力作善とは別の様にあるが、これが矢張り同じである。

全体人間は妙なもので、筍の皮をむくように、同じことを何時までも繰返す。初めは世間的に善くしたいと考え、それでいかぬから、次には理想的にと企てる。次には「宗教でなくてはいかぬ」「宗教は他力でなくては」「信仰を得なければ」終に最後には「頼み心がどうじや、後念がどうの」と、結局すこしでも善くしたい心の外に無いのである。

昨日もある方が「自分は信仰は頂いて居るが、頂いた上の心得が聞きたい」と言られた。私は言下に「心得を聞かねばならんよう、頂いたと言えるか」と申上げた。人間は誰しも皆同じところで苦しんで居るのである。信仰問題に苦しんで「頂かねばならぬ／＼」と云われるのは、結局「よくせねばならぬ／＼」と云うことといささかの違いもない。ここになると人間は取るべき道がない、ここで行き

願は影だにも見あたりぬ。宗教界と言わば、一般社会といわず、滔々として悪くてもよいといふ横着主義と、出来るだけよくやろうとの律法主義で行き詰つてゐるのである。そこへ持つて来て、今斯く私共が、如何にしても眞面目に行ひ得ず、正しくなり切れない、結局苦しむより外ない性分を、かねてあわれと見て置いた、そのための親が特別の心配であるぞと、現われて下されたが實に弥陀の本願であります。故に「悪くてもよいのだ」であつてはならぬ。悪いためにかく万事休すである。一方に「そのような者故、一文も金はやらぬ、五十二段歩いて行け」と厳しい父の誠めを受け、最早起ちあがる力も失せ果てて居同ようなのである。しかるにここに思いがけなく、大悲の母あらわれ「その汝の瞼甲斐ないのはかねて見ておいた。そのために母がかねて用意しておいた故これをやるから、汽車に乗つて行け」と、この瞼甲斐なき奴を飽くまで下からかばつて下さる母の御心である。一度びこの御心に接する時は、私の瞼甲斐ないのがそれほどまで可哀想でお心を痛めて下されたのであつたか、有難いと、今まで眞面目に行える氣で居た者は、その慢心を恥じ、悪くてもよいで腰掛けて居た者は、その横着を心からおそれ入り、このお慈悲一つに腹底から満腹して、ここに初めて人生を超絶させて頂けるの

信 雜 錄

白 井 成 充

「あなたの信仰は——阿弥陀様は煩惱そのままを肯定する」と云われましたね」「煩惱そのものである凡夫の悲しみが、ここに阿弥陀様のありがたい慈悲によつて、その煩惱の一切をも許されて、ここに一人の女性を得たのである」などという言葉を記した小説がある。

然し阿弥陀様は煩惱そのままを肯定するというよつた信仰に私達はどうして安住し得られよう。そして煩惱の一切をも許されるというよつた心境に、どうして弥陀のお慈悲が徹していると云われよう。煩惱を肯定したり許したりされるのではない、煩惱をお救い下さるのである。許すなどという語は此頃しきりに用いられるけれども、祖聖の文献には見当らないように思われる。此處にはただ救うという語が用いられている。救うと許すとの二語に含まれる内的意識には千里の距離があることに注意しなければならない。

煩惱の私をお救い下さるお慈悲といふことに徹底していくほどに、願力を疑い、他力をたのみまいらする心缺けで辺地の生を受けんこと最も歎き思いたまうべきことなり」（十六章）と申されている。こんなに自力の迷執を離れ得ないから、次の言葉に現わされるように、自身そのものがえらい勝れたる者になつてしまつてゐるのである——

「……が、私の今日の生命は、もつと積極的な喜びに満ちています。流刑に処せられて北国へ行く、それさえ

もなお上人の一師教の恩致であると思つて居るのです」もとより御伝鈔に祖聖のお言葉として「そもそも大師聖人もし流刑に処せられたまわづば、我また配所におもむかんや、もしわれ配所に赴かずんば、何によつて辺鄙の群類を化せん、これなお師教の恩致なり」という有名な文があります。上の引文は恐らく此文から由来しているのであろう。

然し此等二文の含む所の内意にはむしろ本質的な相違があることを知らなければならない。一方には自分の思いに誇り、自分の心境の優越に誇る念が動いてゐる。他方には唯師教の恩致に咽ぶ感激が流れている。自分というものは頭を出していない。かかる内意の相異を吾々は僅か一二語の間に識別し注意しなければならない。

此處に掲げたのは無数の例の中の僅か二三のみである。私はこのごろ真宗とか親鸞とかがあまりに喧しく宣伝せられ流行せられるのに、それらのおおむねが殆ど悉く此の尊

ないから、例えれば、次のような言葉が出るのである——「しかし私共のような凡夫が、その淨土に行くに価するほどの善行が果して出来るか。私は到底出来ないことだと思います。それならばこそ私どもは阿弥陀様におすがりして行くのです。ただ一向に念仏を唱えるのです。念仏には助けはりません、ただ真直ぐに、まじり気なしにノ生命がけで！」

如何にも殊勝なる言葉である。然し若しも私達にこんな殊勝な念仏ができるのならば、仏様のお慈悲も無用でないか。ここでは念仏とか称名とかいう言葉がキリスト教などで云う祈禱の意味に用いられている。仏様のお慈悲に腹ふくれないから祈禱が必要になるのである。だから許すなどという言葉が出てくるのである。

歎異鈔に「口には願力をたのみたてまつると云いて、心にはさこそ悪人をたすけんという願不思議にましますといふとも、さすが善からん者をこそたすけたまわんすれと思ひ聖教を汚し、祖聖を蔑にし申してゐるのを見て、感慨に堪えないことがある。此等は聖き名において人々を迷わせるものである。然し「逆誘を縁として」という御言葉もあり「お慈悲にて候ほどに」という御言葉もあるから、無碍の慈光は此等にも障えられず、これ等をも転化して、いよいよ輝きたまうことであらう。

二

善導大師は二種の深心といわれた。「一には決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に流转して、出離の縁あることなしと信す」「二には、決定して深くかの阿弥陀仏、四十八願を以て衆生を攝受したまゝ、疑いなく慮りなく彼の願力に乗じて定めて往生することを得と信す」と。前者は機の深信、後者は法の深信といわれる。この二つは相即して離るべからざる一つの信の表と裏とである。一方が缺ければ他方も備わらない。

多田鼎師は私に、機の深信は罪惡感と同じでないということをお知らせくだされた。罪惡感には必ずしも法の深信が存していないから。

思うに多少の罪惡感は、その程度に無量の別はあるにしても、誰の胸にも必然に発生する事実である。ただそれがアーグスチンとかトルストイというよつた良心の敏感な人格にとつては痛切深刻な意味がある。善導大師の罪惡感

は、単に自分の為した、又は有する罪というのではなく、自分が罪なのである。自分という者の本質そのもの、存在全体が罪なのである。自分の良心というような作用そのものも矢張り罪惡の開展に過ぎないのである。随つてその罪は自分の存在と共に永続的に存在するものであり、道徳的反省に於ては、世界の一切の惡の源泉となるものである。

同時にここに久遠の過去からなるかなる未来にわたりて連綿たる罪の身が知られるのである。

自分全体が徹頭徹尾罪の塊かたまりそのものであるならば、自分で自分の罪惡を知り徹することはとても出来ないはずである。だから罪惡も自分の力以内の感じであるならば、それは要するに「そらごとたわごと、まことあることなき」

世界の中の事に過ぎず、随つてそれだけでは究極の解決は得られない。それが單にかくの如き虚しき仮のものでなくして、却つて真実なものであるためには、自分以上の真実の世界にその根を張るものでなければならない。即ちそれは、单なる罪惡感ではなく、機の深信として法の深信に即するものでなければならない。

病氣になつては自分の病の重さを自分で判断することはできない。ただ医師にまかせ、その言葉を信じて始めて自分の病の重さを知り得るのである。煩惱熾盛、罪惡深重といふ深信は、自分の罪惡感ではない、ただ私の病の真相をくも存じ候が、やがてもとの心中になされ候と申され候ところに、前々住上人仰せられ候。その籠を水につけよ、我身をば法にひてておくべきよし、仰せられ候。万事信なきによりてわろきなり。善知識のわろきと仰せらるるは、信なきことをくせごとと仰せられ候事に候」

(同聞書八九)——八

さらば願わくば聞信のたどりにはげみまづらむ。

四

一法友からいたお手紙の一節に曰く、：「もつぱら乗馬練習にのみ熱中いたし、ついつい貴宅へも参上いたさず、聞くべきことを聞かず、進むべき道を進まぬ心地いたし候。しかも自分の罪惡を認めつつもなお断ちかね申候。然るに、一旦帰京いたして求道会へまいれば快くお迎え下され、誠に悪人をお見捨てなき御慈悲なればこそと有難く感謝の情もあふれ申し候。

或日のこと電車の中にて老婆二人語り居り候。一人曰、私は求道会へだけはお参りさせて、ひだりて居りますと。

私はその時までも阿弥陀仏の有難きに感謝いたし居り候處、如何にも念佛心中より湧き出で申さず、こは如何にと案し居り候處、老婆の言葉に気付かされ、念佛は自分が称えようとして称えられないのだ。私は敬うべきものを敬うことの出来ぬ様な人間なのだ。その悪人をもお見捨てなき

見窮めてそれを私にお告げ下さる大慈悲の御言葉をお聞かせにあずかつて始めて自分のあさましさ—機の深信があきらかにされるのである。

それ故に、单なる罪惡感はおおむね後悔の煩惱を相ともなう。然るに機の深信には懺悔があるばかりである。

前田和上も「罪惡深重などということは、自分として容易に知られるものではないのだ」と仰言つて下さった。私達は全く仏様のお慈悲によつてはじめて自分のあさましさに気付かせていただくのである。

三

是の故に私達は何よりもまず仏様の御慈悲をお聞かせにあずからなくてはならない。聞信如来弘誓願というお言葉はここにも貴い御教を賜わる。

「いたりてかたきは石なり、至りてやわらかなるは水なり、水よく石をうがつ、心源もし微しなば菩提の覚道何事か成ぜざらんといえる古きことばがあり、いかに不信なりとも聴聞をこころに入れ申さば、お慈悲にて候間、信を得べきなり。只仏法は聴聞にきわまることなりと云々」

(御一代聞書一九三)

「人の心得たるとおり申されけるに、わが心はただ籠に水を入れ候ように仏法の御座敷にては、ありがたくたうとお慈悲であつてみれば、ああ何とありがたいことなのだろう、と念佛称えさせていただき申候。……此身を抱いて悲しみたる私は、此身を抱いてよろこばせていただき申候。……」



(此手紙をくれた若き信友、乘田裕道君も、今ははや此世の人ではなくなってしまった)

川 煙 愛 義

院 錦

大

わが知らぬ献血手帖送り来ぬ

病めば哀しく涙ぐむ宵

時折は楽しくもあり出血の多からんとも

名医吉田は (手術決意)

恥の毛をことごとそられ忍びみる

男の子の象徴少年のごと

大いなる影を落として叢雲は

伊吹の前の空を渡れり

雲生るる暁あけの気配のひそけさに

いのちを思ふそのなりたちを

切腹かと独り言ひつつ何気なく

人ごとのやうにわが腹撫づる（手術前夜）

雪冴えて比叡の晴るる昼さがり

前立腺の腹ひらかるる（手術当日）

ならぬ水底金へ大せねむるまつり

たらちねの願ひこめたる現し身に

傷あとつけてメス入れんとす（手術台上）

おぼろなる瞼の上ゆ名を呼ぶは

医師の声か麻醉醒むらし（手術室にて）

血压はおちてかへらず麻醉医の

まどへる獨白意識に入りぬ（手術室にて）

摘出の前立腺は皿の上に血にまみれつ

胡桃より太し

血尿はいまだ続きて微熱出づる

命懸けに交ゆり来るところに井戸の世界は異聞もある

もろもろの愁ひ告げたき比叡山の

取二大智惠が仰ゆるある事かの非難由を出る

するこゝは

眞 実 の 宗 教

光輝書翰の出現と四十八歳の歎息と開土の里なり

うちもで出来ます。そこそこおこなう北境さへこそ全利は又お

命懸けに交ゆり来るところに井戸の世界は異聞もある

宗教が一般に大きく誤解されている一つに、次のような間違があると思います。それは世間でよく「ものは思ひよう次第」と云われますが、それと同じように信仰とか信心とかいうのも、つまりは主観的な心の自慰に過ぎないと考える思い違いであります。

眞実の信心とはまさにそれとは正反対に、主観の影を払うて、あるべき世界の究極の眞実に、われわれの生命が交わらしめられることであります。

どうしてそうした事が可能であるかといえば、ちょうどわれわれの身体が地球の空間の中に抱かれて存在しているように、われわれの心は究極の眞実のふところから外に出ることはできないからです。哲人が「眞実なるものは全体なり」といったように、眞実が眞実なればなるほど総てを包み総てを貰くものであるからであります。仏教ではその究極的眞実を真如と名づけています、眞如はわれわれのこの微少なる心の底にも來り貰き宿つてているのです。しか

寂かなる姿病みて仰ぐも

はかなきは人の生命か比叡山を凝視るひまさへ

光はうつろふ

1000ccの点滴終り吊されし

空のボトルは風にそよぐも

夜もすがら病室めぐり容態を看守る

ナースよ労れはなきか（夜勤の看護婦）

生かされて生くる身の幸思はばや

恙ある日も恙なき日も



に法藏菩薩と現じて大悲の本願をわれ等がために成就される所以があります。

大悲の本願を決して神話と見誤つてはなりません。神話とは人間の心が描き出した物語であり、内になるものの表現であります。本願とはわれわれが真実に撰め取られる道であり姿なのがあります。それが神話では、本願の大悲に撰め取られるとき、そこに真実の生命が顕現し、生き甲斐の実証が果されるからです。生き甲斐はわれわれがその本性の願いを全うしたときに見出されるのです。その本性を全うするとは、われわれが究極の真実そのものに對面し、眞の在り方に適うて生かしめられるときであり、その可能性の約束されたものが人間の精神であります。

こゝに人間の尊重と、眞の宗教体験の根據とがあるといわねばなりません。

先に方便という二ことを言いましたが、さらに別の角度から私は仏の莊嚴ということを思うのです。眞実は人間の生命感情に交わり来るところに莊嚴の世界が展開されると仰ぐことが出来ます。さらに広く莊嚴ということを味わえば、法藏菩薩の出現も四十八願の成就も仏国土の建立も、ことごとくわれわれを攝取したもう眞実界の莊嚴相として敬仰することが出来ると思うのであります。『起信論』に「眞如に大智慧光明あり」とあるのも、またこの莊嚴相を語る

ものではありますまい。

聖道門はまことに意氣壯なるものがありますが、惜しむらくは莊嚴相の赫々たる有難さに意をとどめず、眞如に直入することを期しますから、その道は近きに似て却つて遠きに墮する結果ともなるのであります。親鸞聖人が豎超豎出と判じられ、「歴劫巡回の菩提心」と申された所以がそこにあります。これに對して本願の大道を横超の直道と名づけられ、「願成就一実圓滿の真教」と仰がれまた「横超とは斯れ乃ち願力廻向の信樂なり」と申されたおころを有難く頂戴するのであります。

かくて攝取不捨のまことの実現する場を信樂とよび、信心といいます。その信心こそ、人間がまことの人間となる道なのであります。従つて特定の神秘的内容に酔うようないる種の信仰とは根本的に異なることを銘記しなければなりません。今日、宗教の言葉が乱用されているために、あらぬ先入観に捉われて、己が生命の眞の叫びに應えることの出来ない青年の多いことは悲しむべきことであります。人間の根本問題を解決し、生命の扉をたやすく開くことは一日もゆるがせにできない私どもの急務であります。聞法とはその急務にいそしむことに外なりません。

凡骨日誌抄(15)

—— 仏のみ名を聞く ——

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚偽をいだけばなり。貪瞋邪偽、奸詐百端にして惡性やめ難し。事、蛇蝎に同じ」とは、善導大師の觀經疏・散善義による親鸞聖人御身読のお言葉である。

善導さんは、なんとオーバーなことを仰せになることか。殊に「事、蛇蝎に同じ」と、よりによつて私の大嫌いな蛇とか、さそりとかに同じとは何ごとか。これこそ中国的

なオーバーな白髮三千丈式の表現であると思い、軽薄にもそのように人さまにも申したことありますけれど、これまでこそ、私の軽佻な浮薄さを暴露する以外のなにものでもありませんでした。

まことに慚愧々々。いや無慚無愧の極みがありました。

聖人最晩年の御和讃には、右の善導さまのお言葉がよほど深く聖人の御身に沁み徹し給うたようで、その「愚癡悲歎述懐」には「惡性さうにやめがたし、こころは蛇蝎のごとなり、修善も雜毒なる故に、虚偽の行とぞなづけたる」

西元宗助

と述べていらるるではありませんか。

あらためて省みさせられましたこと、聖人の御境涯を離れ去ること千万億里のわが身でありますことを。

ある若い御夫人が、ある日、訪問してくださる。その方の思いがけない切ないお話に、いつのまにか家内は泪を目いっぱいいためている。わたしは、なんともお慰め申しあげようもなく、口の中でつぶやくようにお念仏申すほかはなかつた。まことにこの世は苦海である。そして私ども苦惱の人間を、ホントウに救い上げることのできるおん方は、み仏のほかにはおられない、そのことを痛切に思わしめられたことであった。その美しい方は「いろいろと愚痴を申しあげました。すべてはわたしの宿業でございます」とつましやかに仰せになつて辞去なさる。そのお言葉に、私ども夫婦も亦私どもの宿業ということを沁み／＼と思ひ、

み名を念じ申すことでした。

○

花田正夫先生ご退院のこと、久々に直筆のおたよりをいただく、嬉しいことでした。その間、わたしは迷士らしく、

鹿児島・宮崎に行つたり新潟や宇都宮に赴いたり、そして久振りに気候不順のためか鼻をクシュン／＼とさせたことありました。その閑居に、とつぜん金子宏先生ご来宅。

先生は金子大栄先生のご令息であられるし、わたしの娘たちの高校時代の数学の先生でもおりなさる。あれこれとお話を承りましたが、その中で、宏先生の仰せ、このあい

が、その中に、われらは本願の名号によつて助かると、きびしくお諭しいただいて、そのお言葉が深く身に沁みましたと、芳薫を残して辞去される。

その夜、久振りにわが足利淨円師の『一樹の蔭』を拝読、殊にその一節の『聞名の宗教』をいただく。その仰せに、

「称名とはみ名を聞くことあります。念佛とはみ名を聞くことあります。念佛とは口を動かして懸命になつて努力している心に価値があるのでなく、つつしんでみ名において打ちあけられてある如來の御心を聞くことあります。称えるのでなく如來の眞実の、自分を呼びさましてくださる御声を、そのままに聞くところに淨土真宗の全體があり、親鸞聖人の宗教のありたけがござります云々」

松本解雄先生を憶う

予此解雄君

亀岡邦生

の上京されるたびに、先生は必ず拙宅にあるいは私の勤め先にお電話を下さった。仕事がら予定ができるいでお会い出来ないこともあつたが、たゞえ電話のお声に接するだけでも、私はどんなに励まされ、勇気づけられたことだろう。

あとで友人や先輩達に聞いた話によると、先生は上京後の私のことをひどく心にかけておられたという。生来が無鉄砲で、尻軽な男である。職は落着かない。しかも夢だけは人一倍持っている。あんな男を東京におっぽり出したら、どんなことになるやら……。私の母も心配したらしく、ちよくちよくやって来ては説教した。

「自分にも絵描き志望の世話を焼き息子がいるが、あれはあれでまた楽しみなものだ」と、なごやかな顔でおっしゃる。音楽や絵の話、それに語らつて下さり、私は内心ほつとした次第であった。

(仮名づかい訂正) 云々と。

浄円先生の二十二回忌のご命日に、これを誌す。

ゲエテの言葉

真実というものはたしかに一個のダイヤモンドに比較することができる。

ダイヤの光は、ただ一つの面だけに射さないで、多くの面に射すものだから

人間はつねに迷つてゐる。迷つてゐるあいだは、つねに何かを求めてゐる。

○ 決して人に欺かれるのではない。自分で自分を欺くのである。

が常であった。ある時など、ふいに席を立つて「一度君の職場が見たい」と言われる。私はいささかうろたえあわてながらも、「それならどうぞ」と、内心しぶしぶと、私の職場へとご案内した。編集室というのは何處でも大体そうだが、まさしく乱雑な修羅場。特に私のところはひどかつた。先生の研究室がいつもきちんと整頓され、机の上が片づけられていたのを知つてゐるが故に、なおさら気が重かつた。とにかくもやけつぱちで、私の恥部をお見せするようなつもりであった

セカセカ、ガサガサ、ワイワイ。そんな修羅場に現われた先生の静けさと落着き、和やかさ、穏かさ。私はそこにある連中を集め、インスタント茶話会を開いて、先生にお話を願つたことだった。先生はそのゴミゴミした雰囲気の中で、のんびりお茶をすりながら、愉快そうに楽しそうに語らつて下さり、私は内心ほつとした次第であった。

その時も、先生は短大の教え子たちの職場まわりに上京されたと聞いた。そのついでに私の所も、ということになつたのかかもしれないが、その理由はともかく、私のような駄々っ子でヤンチャな人間は、たとえ妻子を持つようになつても、いや、そうなればなるほど心にかかるものらしい。その分だけ私が肩ひじ張つて、リキミかえつて、自然の流れからハミ出して生きているのではなかろうか、としみじみ思つたことであつた。

先生が教え子の結婚

先生が教え子の結婚式に招かれて、その披露宴の席上何よりも好きなバイオリンを抱きかかるるように倒れられたと聞いた時、私は一瞬、先生の全てを垣間見たように思つた。まさに大往生だな、と思つた。弁慶のあの大往生とちがつて、なんと和やかで平和な楽しい死だつたことだろう。教え子のことを心から祝福しながら、思いをこめてバイオリンの弓を引き、まるでキュー・ピットの矢に当つたかの如く、無邪気に倒れられたと聞けば、平和な極楽の音楽が引き続いて鳴り響いたに違ひないとさえ思えてくる。

私たちの時もそつうであったが、先生は教え子の結婚式その他何であれ、招かれれば、何処へでも出かけて行かれたそれは仏青の諸行事には必ず顔を出させていたことを思えば容易にうなづけることである。そして、その先生の思ひが、願いが、仏青の全てであつたことは、先生が松山を去

られてからの仏青を見れば一目瞭然である。先生がいかに私たちに思いをかけ、心を配つておられたか、私たちの中に自然に溶けこんで、常に私たちと共に歩んで来られたか、松山を去つて年月が経つほどにますますはつきりしてくるのを覚える。それがあまりにも自然で、少しの思わせぶりも、押しつけもなかつたために、それがあまりにも素朴で無邪氣で何の氣どりもなかつたために私たちはその先生の偉大きさに甘え切つて、その偉大きさに気づかなかつただけなのだ。

「仏」とはそういうかたなのかもしれないな、「妙好人」とは先生のような人のことをいうのかかもしれないな、と、日が経つにつれて高まっていく先生への思慕を、私はおさえることができないのである。

最近になつて私は先生の学生時代からのことをたれられた名古屋の花田正夫先生、京都の東昇先生などをお訪ねした。松本先生の若き時代のこと、ご信仰のことなどを聞きするにつけ、先生の偉大さを再確認するとともに、先生の私たちにかけられた願いを、私たちは決して“無”にしてはならないと、固く心に誓つたことであつた。

念仏詩抄

無相

木

お助けはた ムアミダブツ

ナムアミダブツ

香樹院德龍師

香師おおせに
“闇（やみ）の夜に
目をあけてみても
こちらの目からは
明（あかり）は出ぬ

闇のわたしに
闇のわが身が
見えるのは

ただただ如来の
おひかりゆえ
ただただ如来の
おひかりゆえ

あるマンマ
“わたしはウソの念佛ばかり
称えております”
と言ひしに
香師おおせに
オレもウソの念佛ばかり
称えている
こちらはウソでも
如来様のオマコトで

お助けじやー

物の教するなら機場まわりに来る

ナニを言うても が、もう理由はしない。私がそん

ナニをしても

ナニを思つても

ウソばかりのこちらゆえ

お助けはただ

如来様のオマコトで

如来様のオマコトで

お助けはただ

ウソばかりのこちらゆえ

五劫思惟と
言うておれー

ああ

五劫思惟

わたしのための

五劫思惟

ご恩

如來の

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

無は少し

日

本

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

ある

同行

わ

た

し

は

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

香

師

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

信

心

とい

う

こと

は

い

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

聞

其

名

<p

平

に つ い て

て

花 田 正 夫

一、聖德太子の和への教え

現在、英國とアルゼンチン。イランとイラク。そして、イスラエルとレバノンに戦いが続いている。その背後に超大国のソ連と米国が動いていることもうかがわれる。

こうした時、平和について真剣に考えたいと思う。何時の時代でも、また何処の国でも平和を願わぬ人は居ない。然し現実の歴史をひもとく時、戦争の絶え間はない。西欧の諺言にも「地獄への道は、美しい理想の花で彩られている」とあるが、全くその通りである。

さて、平和論に理想的平和と妥協的平和がある。理想的な平和は、現実には破れている、かと云つて戦争は肯定出来ない。こうした世界に、利害得失を根とした妥協的平和は見られるが、これは条件の変化によって不安定である。

ここに、個人的な、自分自身の問題として、これをとりあげたい。他人に平和を求める前に、自分自身が平和を守つているかを省みたいのである。

第十条に、争いの根本は、「我是他非の独善が本であるが、お互に凡夫同志であるから、正しい是非善惡を定め得る人ではない。だから自分はよいと思つても、不完全な身を省みて相手の立場に立たねばならない、何時までも我執に終始してはならない」と諦められている。

私見であるが、ここに大逆の馬子に対する太子の態度が「共是凡夫耳」として表白されるとと思う。馬子を大逆人として責めても、その悪人を自分の力で導くことの出来ぬ身、盲人を盲人と知れば、道に迷うのを見ては手をさしのべて、安全地帯に入れるべきなのに、それを傍観して批判しているのでは、自分自身もひどい人間であると云わねばならぬ。この痛切な表白こそ、この一句である。然し、このことを概念として受け容れることは容易であるが、自覚として身にいただくことは至難である。十地経によると、菩薩も八地の不動地に達して始めて凡夫地を脱するが故に、凡夫の自覚を生ずるとある。ここに太子がこう云われるには第二条の体験があつたことを想わされる。

第二条に、「篤く三宝を敬え、それ三宝に帰らずんば、何を以つてか枉れるを直せん、とある。枉れる身とは、太子御自身の自照である、それが直されるには、凡夫の枉れる心をよく理解して下さり、その故に満腔の慈悲をもつて、

太子は若冠二十にして、日本最初の女帝推古天皇の時、太子の位につかれたのであるが、当時閥族の最とされた蘇我馬子と政局に処してゆかれねばならなかつた。然し馬子は太子の伯父君にあたる崇俊天皇を殺害した大逆人である。太子の苦惱は如何ばかりであろうか。幸いにも二十二歳の時、高麗の僧、慧慈の帰化するに及び、太子は之を師とされて二年間ひとりすじに求道し、二十四の頃初めて仏法の玄意を獲られて、勝鬘經、法華經、維摩經をきわめ給つて、三十一の時、憲法十七条を定め、万人の行くべき道を高く掲げられたのである。

第一条に、人の集るところ徒党が出来て、互に相手を攻め合つて、相手を理解出来ないで、國は乱れ、家庭は破壊している。それにつけても、和ぎの光が望ましいことである、忤うことのない人格を求めねばならぬ、と示されている。

今、一人の私となつて、はぐくみそだてて下さる仏の御手によるほかはない。この大悲心こそ、生きとし生ける者の安住所であり、それにそむく國は亡び去らねばならぬと仰言つてゐる。

こうした太子は、法華經の「提婆品」を非常に尊ばれて釈尊に反逆した提婆達多をも、釈尊は、提婆によつて気づかされたことは多い、わが善知識である。やがて未来には天王如来となるであろう、と言われてあることを我が身に深くいただかれたことであろう。

以上、太子は和を貴ばれながら現実に「我是他非」と対立抗争の心のやまぬにつけ、生死を超え、善惡を超えた仏心によつてのみ和ぎの光をいただかれて、万人に仏徳に帰せよと勧められたのである。

二、法然聖人の和への道

聖覺法印の記による黒谷源空聖人伝に、父君が横死された時、当時九歳の聖人に遺言せられて、「我死去の後、世の風儀に堕つて敵を恨むことなけれ。これひとえに先世の報なり。もしこの讐を報いんとおもわば、世々生々互に害心を懷いて、在々所々に輪回絶ゆることな

からん。生ある者は皆死を悲しむ。愁憂さらに限りなし。
死^レの^モよき通す。人まこと可ぞ痛まざらん。哉この命を惜

我この瘤を痛む。ノまた何を病む。我の合掌。人あに惜しまざんや。我が情をもて人の思いを知るべし。然れば則ち一向に専ら自他平等の済度を祈り、怨瞋ことごとく消えて、親疎同じ菩提に至らんことを願うべしと、言いおわりて、心を直し西に向つて、高声に念佛して眠るがごとく命終し給いけり」
とある。
その後十五の時、受戒され、十八になられて黒谷の禅室に入り法然房源空と名告らる。然し「法は深妙なり」といふども我が機すべておよび難し、經典を披覧するに、その智最愚なり。行法を修習するに、其心ひるがえつて味じ。朝朝に定めて悪趣に沈まんことを恐怖す、夕々に出離の縁の抜けたることを悲歎す云々」と四十三歳の時、大難闘に遭遇されたのであつた。幸に善導大師の四帖の疏を得て、選択本願の念仏の玄意を得られ、やがて凡夫往生の道として淨土門を開かれたのである。

善惡の凡夫を憐愍される大悲大願を仰がれて、聖人の胸に怨讐の闇はひらかれると共に、荒武者熊谷直実もまた、直実が殺した敦盛の子も同一念仏に帰したのである。法句経にも「恨みは恨みによつて消えず、恨みは恨みなきによつてのみ消ゆ」とあるが、相対五分五分の世界にする道を我が身にいただいて、和戦を超えた大道をしつかりと歩ませて貰いたいものである。

最後に隆寛律师が念佛法難のため、御流瀉の途上で、相摸の四郎が念佛門に帰した顛末を想う。彼が廿二の時、「身は武家に生れたりと雖も、心は仏道にかけたり。願わくば家事も捨てずして生死をはなるべき道を教え給えと申されしに律师のたまわく。

年少の御身、武家のうつわものとして、この御たずねにおよぶこと、宿善の内にもよおすなるべし。凡そ仏教多門なれども、聖道淨土の二門をいです。しかるに聖道門は、有智、持戒の人があらすば、これを修行すべからず。淨土門は、極悪最下の機のために、極善最上の法をさずけられこれば、百智無用にて、三昧當天

たれは 有智無智をえらばず 在家出家をきらわす。弥陀他力の本願を信すれば、往生うたがいなし。なかんずく末法に入りて七百余年、時機相応の教行は、ただ念佛の一門なり。されば飛錫禪師は、末法にのぞみて、余行をもて生死をいとうは、陸地に船をこぐがごとし。他力をたのみで往生をねがうは、水上に船を浮かぶるが如し、とのたまえり。しかれば名号本願の船にのりて、弥陀如来を船師とし、釈迦発遣の順風に帆をあげなば、罪障の雲もしらずまり、妄執の波もたたずして、一念須臾（ちよゆ）のあいだに、極樂世界、七

自分を自分以上と見ると慢心、自分以下に見ると卑屈。
他人から自分以上に見られると偽善におち、自分以下に見られると反抗する。

む煩惱具足の凡夫には、恨みなき心境にはどうしてもならない。ここに、恨みなき人とは、老少善惡の人をへだてたまわぬ仏の大悲の力のみによつて、冰がとけて水に転ずるよう、怨憎のしこりが功徳に転ぜられるのである。法然聖人にしてみれば、父君の御遺言により、修学修行によつて恨みなき心を求められたけれど、その不可能な身と知られて、光明を浴びられたのである。

あ
と
が
き

梅雨もすぎてよいよ三伏のきびしい陽光
が射してきました。皆様の御健勝を祈念申し
ております。私共老爺老嫗となり杖を頼つて
の生活ながら一日一日の無事をよろこんでお
ります。

○

近角先生の釈迦弥陀二尊の慈悲の父母とし
ての讃仰のお言葉を「求道」から頂きました。
てでは打つ、母は抱いてかなしむをかわる心
と子や思うらん、とは私共の中学時代によく
聞かされたものです。改めて思い出して軽薄
に聞いていたことを恥じております。

した。

亀岡邦生さんは樹心社を創立され、活躍中
であります。松本先生の三回忌の追悼集に投
稿されたものを頂いて、先生の徳光に接しま
した。

木村様から只今も速達のおたよりを貰い、
半盲無相と記していられるのに、感深いもの
があります。新聞を読むにもスタンドの電灯
の光だけでは読みにくく、懐中電灯で照らし
ました。聞法の旅の枝折にさせていただき
ましよう。

川畑愛義様の入院雑誌、ことに老年期の前
立腺の手術の実状をそのまま教えられました。

井上様の真実の宗教の一文は、功利を中心
とする世上一般の信仰心に大きな警告をして
下さいました。

西元様の日誌抄は足利淨円先生の二十二回

忌のご命日に聞名の宗教の灯火をかかげて下
さいました。いよ／＼忙しく御仏縁を持たれ
てのお生活、障りなけれとひそかに念じてお
ります。

振替の口座番号が五十七年六月から機械処理の
実施により、左記の通りになりましたのでお知らせ
します。

◎名古屋 六一一〇四七〇番
お知らせ

日曜の例会はじめ、今まで続けました法話会は
まだ開くまで体力が恢復しませんので、この点重
々おわび申上げながら休会させていただきます。

おわび

にする人のすくないことを思い、大空の星の
光にあこがれて、足下を忘れた危なさを思い、
太子と法然聖人の教えを改めて私自身にいた
だきました。御叱声をお願いいたします。

定	価	半	年	八〇〇円	(送共)
編	集	一	年	一六〇〇円	(送共)
印	集	名古屋市南区駄上町	二ノ八八		
刷	發行人	花田正夫			
電	電話	八二二局七〇三七番			
人	愛知県西加茂郡三好町大字福谷				
坂	名古屋市南区駄上町	二ノ八八			
部	郵便番号	四五六七			
光	振替口座	名古屋六一〇四七〇番			
社					